「アウシュヴィッツ」を考える

～涙を流すより考えてほしい～

エッセイスト　近藤　節夫

1．「絶滅収容所」見学を決める。

昭和20年（１９４５年）４月、疎開先の千葉県南房総の小さな町の国民学校へ入学して間もなく太平洋戦争は終わった。幼な心には終戦というはっきりした認識はなかったが、おぼろげながらも周囲の様子がそれまでとは幾分変わったように感じてはいた。

けたたましく敵機来襲を知らせる警戒警報のサイレンが鳴るや、自宅近くの枇杷山の防空壕へ毛布とゴザを抱えて駆け込み、遠くから「ケイカイケイホウ～カイジョ～！」の甲高い声が聞こえてくるまでじっと耐えていた。目の前に大きく広がる田圃の中を走る房総西線（現内房線）の列車が、米軍機の機銃掃射を受けて黒煙が立ち上がる様子を身じろぎもせず、じっと自宅２階の窓越しに見ていたこともあった。灯火管制が厳しかった終戦間際の晩には、外から光が漏れていますよと隣組のお年寄りに注意され、母が慌てて電燈に風呂敷をかぶせたこともあった。

そんな幼児体験を胸に学生時代のめり込んだ「60年安保闘争」に触発され、社会に出てからベトナム反戦運動に加わった。その余勢で激しい戦火のベトナムに出かけた。夜になると度々の停電と走りまわる米軍装甲車のサイレン、時々聞こえてくる爆音に気持ちが落ち着かず、挙句に苛立った米軍兵士に銃で恫喝され、そこで改めて本物の戦争の異常な空気というものに触れたように感じた。

１９６７年第３次中東戦争直後に当事国のアラブ諸国、アフリカへ出かけ、スエズ市内滞在許可証を持たなかったスエズ運河では思いも寄らず警察に身柄を拘束され、一時軟禁された。戒厳令下のヨルダンの首都アンマンでは、ヨルダン軍兵士に包囲されてライフル銃を突きつけられ身の毛がよだつ恐怖を感じた。翌68年には内戦が終結して独立したばかりの硝煙燻るアデン（現イエメン共和国）空港では、入国審査で揉め、すったもんだの騒ぎの挙句、何とか日本人として初めて入国を許された。こうして厳しい戦時下の海外でひとり旅を重ねて少しずつ戦争の真の実態を知り、戦乱の中で生活する人々にコミットすることにより戦争の怖さと愚かさを痛いほど思い知らされた。

その後鉄道会社から旅行会社へ転籍して、太平洋戦争戦跡巡拝団を企画し実施したことや、旧厚生省主催の戦没者遺骨収集事業に携わったことがきっかけで、戦地の死の淵から帰還した多くの旧日本軍の兵隊さんや、戦没者の遺族らと知り合い広範に交流を重ね、つい最近までこれらの人たちと心から親交を深めてきた。海外の戦跡地で知り会った現地の人たちとも長年に亘って交流を続けてきた。だが、それらの人たちも年々彼岸へ旅立つようになり儚くも今や私が知る戦争体験者はほとんど鬼籍に入られてしまった。自分自身知らず知らずの間にこれらの

人々との深いお付き合いを通して生々しい話を聞き、また度々海外へひとりで出かけ、想像も出来ないほど怖い目に遭ったり、近代戦争の戦火に触れることなどにより、戦争という得体のしれないおぞましいものの実態を臨場感として感得するようになった。それが反戦への気持ちを一層強めて行った。

当てもなく連行される収容者（展示写真より）

海外ひとり旅で戦跡の地を訪れたり、戦争関係者に接触して情報を得ながら個人的に資料を漁り調査研究を続けている内に、次第にもっと戦没者の実態と心情を調べてみようという気持ちが強くなって来た。

翻って人間とは太古の昔から生きて行くうえで自らの身を外界の敵から守るため自然に自己防衛本能が働き、仲間内で仲間意識を固め、外敵に立ち向い他民族を排除、抹殺してきた。すべての敵を殲滅させる皆殺しこそが戦争の原点であることに改めて思いが至った。

ナチス・ドイツの残虐行為は、全ドイツ人にとって敵であるユダヤ民族を抹殺すべきであるとの確信からあの唾棄すべきホロコースト（ナチス・ドイツによるユダヤ人大量虐殺）、そしてアウシュヴィッツ（Auschwitz）「絶滅」収容所の悲劇を引き起こした。それにも拘わらず、相も変わらず今も世界各地で不気味な戦争への疼きが見え隠れしている。

今世紀に入ってからも悲劇的で忌まわしい戦争は世界各地でしばしば起きている。私自身冒頭に記したような幼児体験に始まり海外武者修行を通して現代戦争の現場に踏み込み幾度となく危うい体験をした。**なぜ戦争は起きるのか。**戦争はどんな結果をもたらすのか。何が得られ何が失われるのか。いくら考えても戦争を肯定し納得できる確信的な答は何ひとつ思い浮かんで来ない。それでもなお人間は愚かにも同じ人間同士の戦いを止めることができない。それは過去の歴史を振り返ってみれば明らかである。戦争を他人事ではなく自分自身の身近な問題として捉え、ナチス・ドイツがアウシュヴィッツで行った残虐な行為と同じように、極論すれば、自分たちの両親や家族が目の前で惨たらしい仕打ちを受ける様子をイメージしながら、戦争とは恐ろしいものだと骨の髄まで身に染みなければ、戦争という残虐行為には終止符を打つことはできないのではないかと思うことがある。繰り返し繰り返し引き起こされる戦争、止めるために打つ手はないものだろうか。

初めてビルマ（現ミャンマー）の旧日本軍戦跡地を訪れてからほぼ半世紀が経過した。この間旧日本軍が戦った数多くの戦地を訪れ戦没者に慰霊の気持ちを捧げながら、悲惨な戦争に関して個人的、かつ多角的に見聞を重ねて自分なりに関心を抱き戦争の実態を調べてきた。それによって培われた自らの戦争観をきちんと整理するためにも、この際第２次世界大戦中最も残虐で悪名高いホロコーストの現場であるアウシュヴィッツ収容所は何としても訪れ、過去の惨たらしい事実を自らの目で見て、

その環境に五感で触れて自分自身で考えた末に納得することが大切であると考えたからである。こうしてアウシュヴィッツを訪れることを決めた。

実際訪れてみて、アウシュヴィッツ収容所は想像していた以上に心に重苦しくのしかかってきた。このアウシュヴィッツ収容所は、ポーランドの小さな街、オシフィエンチムをナチス・ドイツがドイツ語でアウシュヴィッツと名付け、ユダヤ人をこの世から抹殺する目的で建設した、一旦収容されたら絶対逃れられない絶望的な「絶滅収容所」と呼ばれている。現在当時の名を残しながら、１９４７年「アウシュヴィッツ・ビルケナウ国立博物館」としてオープンし、現在ユネスコから負の世界文化遺産として登録されている。

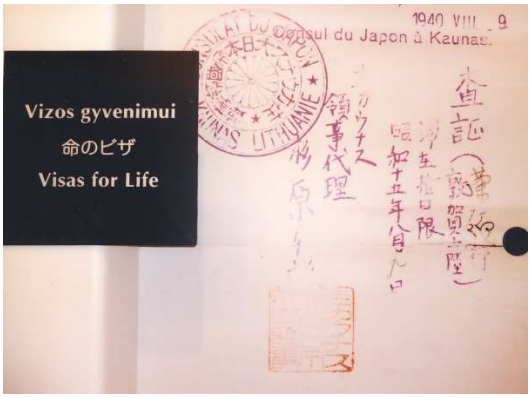
2．「命のビザ」杉原千畝のレガシー

アウシュヴィッツ収容所訪問に当たり、次のような心の葛藤があったことも告白しておきたい。それはわれわれ日本人がそこまで心に病む必要はないにせよ、第２次世界大戦中日本の同盟国ドイツが、身勝手な理屈でユダヤ人に対して行った残虐行為を直視することに少なからず戸惑いと躊躇する気持ちがあったからである。ドイツが不遜にもユダヤ人は自分たちを滅ぼす永遠の敵国民族と考え、ユダヤ人は地球上から絶滅されるべき民族として、大戦中に６百万人もの罪もないユダヤ人を大量虐殺した。その理不尽で残虐な行為が行われた現場を訪れることに、かつての同盟国国民のひとりとして心の奥に若干ひっかかるものを感じていた。

現地訪問前にはあれほどナチスの残酷な仕打ちの実態を知りたいと見学を熱望していたにも拘わらず、いざ訪れる時が近づくにつれて次第に心が重くなり、瞬時訪れたくないような矛盾した気持ちにも捉われた。

ある日本人シベリア抑留者は、アウシュヴィッツ収容所の入口で立ちすくんで中々前へ進めなかったという。戦争について残酷なイメージしか持たない、ごく普通の市民にとっても、ここは正にジェノサイド（民族殲滅）への地獄門に見えるのだろう。

そんな滅入りがちな気持ちを救ってくれたのが、アウシュヴィッツ収容所を訪問する前に、隣国リトアニアでカウナス旧日本領事館を訪れて、杉原千畝元領事代理の人間的で誠実な人柄



杉原千畝の家族（上）と命のビザ

と名誉ある功績に触れることができたからである。ユダヤ人を大量虐殺したアウシュヴィッツに対して、杉原の行動は多くのユダヤ人を救った人道的行為だった。ヨーロッパ戦線が徐々に拡大して行った１９４０年、杉原領事代理は外務省の許可を得ずに独断で彼らに日本通過のための一時ビザを発給した。杉原は、必死になってヨーロッパから海外へ逃れ出ようとするユダヤ人に対して、人道的見地から日本通過を認める「命のビザ」を発給したのである。６千人ものユダヤ人の生命が救われた一外交官の行為が、ユダヤ人社会で尊敬と驚きを以て伝えられていた。戦時中アウシュヴィッツ収容所内でユダヤ人虐殺という蛮行が現実に行われた事実が話題になる一方で、ユダヤ人の命の恩人、杉原千畝は「日本のシンドラー」としてユダヤ人社会

外装工事成ったばかりの旧領事館（上）
「命のビザ」発給の杉原千畝執務室の筆者

で敬愛を以てスポットを当てられていたのである。

日本国内では、この杉原千畝の「命のビザ」発給によりユダヤ人社会でその行為が称賛されていたことは、ほとんど知られていなかった。杉原の行動が世に知られるようになったのは、91年10月新聞紙上に「杉原復権」との記事が掲載されてからのことである。これに関連して、２０００年10月10日杉原千畝生誕百周年を記念して、外務省外交資料館で「勇気ある人道的行為を行った外交官」と記された杉原千畝顕彰プレート除幕式が、河野洋平外務大臣、及び幸子夫人の手で行われ、併せてこの席上河野外相は幸子夫人と遺族に対して、戦後外務省が杉原を一方的に解雇したことにつき日本政府として謝罪した。こうしてその後外交官「杉原千畝」の名は、ユダヤ人の中ばかりでなく日本人の間でも広く知られるようになった。

僭越であるが、その杉原とリトアニアについては、細々ながらも個人的な縁を感じている。杉原は戦後47年２月、シベリア経由でブカレスト（ルーマニア）から帰国して以来、秀麗冨士と景勝江の島を望み、松林を通って潮風の匂い漂う湘南のリゾート地、神奈川県藤沢市鵠沼に生活の居を構えた。長年同じ鵠沼に住んでいた私にとってもそこは青春時代を過ごした思い出深い懐かしいふるさとである。

湘南地方の別荘地鵠沼は、戦前から秩父宮殿下・妃殿下を始めとして、廣田弘毅元首相、阿部次郎、芥川龍之介、寺田寅彦、川口松太郎、岸田劉生、加山又造ら、多くの政治家や著名な文人墨客が愛した軽井沢と並ぶ、都心に近い高級リゾートとして知られていた。杉原の長男弘樹は、地元の私立湘南学園中学で今夏亡くなった作曲家の平尾昌晃とクラスメートだった。53年

56年湘南高校卒業時の長男弘樹（最前列左から３人目）

同校を卒業して神奈川県立湘南高校へ進学し、在学中は吹奏楽部に所属してテナーサックスを吹奏していた。卒業後アメリカへ渡りカリフォルニア州立大学サクラメント校を卒業した後、アメリカでコイン・ランドリー会社を起業し、営業活動旁々しばしば日本へも里帰りしていたが、２００１年64歳で他界した。愚兄紀男とは高校の同期生で、兄は現在ベルギーに在住する四男伸生氏とFacebookを通して交流している。翌年湘南高校へ入学した私は弘樹の後輩となった。偶然にも現在リトアニアの重枝豊英大使も、隣国ラトヴィアの藤井真理子大使もともに同じ母校の同窓生である。このようなプライベートな一面からも、杉原千畝とバルトの国々に仄かな絆を感じている。

86年7月杉原は鎌倉七里ヶ浜沿いの病院で波瀾に富んだ86年の生涯を閉じ、霊魂は今静かに鎌倉霊園に眠っている。

幸いにしてリトアニアでその因縁浅からぬ杉原千畝・元領事代理の偉大な足跡を訪ねることができたことは、極めて感慨深いものとなった。リトアニアでは杉原の「命のビザ」発給の功績が広く認められて記念切手まで発行され、多くの人々から尊敬され慕われている。

カウナス駅壁面の杉原千畝顕彰プレート

旧カウナス日本領事館は最近日本人ボランティアにより外装に手が加えられ、現在杉原記念館として閑静な住宅地の中にかつての姿のまま大切に保存されている。そこには毎日多くの見学者が訪れ、最初にビデオを鑑賞して話を聞き、杉原がビザを発給した執務室を見せてもらって当時の杉原の行動に感動の気持ちを禁じ得ない。40年9月カウナス駅を列車で去る直前まで杉原は、駅へビザを求めて追ってきた人々に対しても献身的にビザを発給し続けた。そのカウナス駅舎の壁面にも現在杉原の功績を永遠に称える金属製プレートが、一段と目につくように掲げられ、輝かしくその功績が顕彰されている。

更に首都ヴィリニュスにも「さくら公園」と呼ばれる小さな公園内に、杉原千畝の功績を称えた大きな杉原千畝顕彰碑が建立されている。２００７年5月、天皇・皇后両陛下もこの杉原千畝顕彰碑を訪問された。これら日本人である杉原千畝のユダヤ人に対する献身的な行動のレガシーに向き合うと、杉原が現地の人々からいかにその行動を感謝され、心から尊敬されているか、その温かい人間性と実直さ、そして成し遂げた業績が想像され、心が和むような温かい気持ちになる。思わず日本人として嬉しく誇らしい気持ちが込み上げて来るのである。

ポーランド入国前にリトアニアを訪れ、杉原千畝の偉大な功績に触れホッとして救われたような心境になり、憂鬱だった気持ちを切り替えて念願だったアウシュヴィッツの門を潜ったのである。

「さくら公園」内の杉原千畝顕彰碑

3．戦地巡礼の起点・戦跡巡拝団

１９７１年、初めて旧日本帝国陸軍第５飛行師団・飛行第64戦隊（通称「加藤隼戦闘隊」）戦跡巡拝団企画実施に当たり、その依頼と手配を確認するため、初めてビルマ（現ミャンマー）の土を踏んだ。その当時ビルマではまだインバウンド業が夜明け前で、外国人観光客の受け入れ態勢が整っていないと聞き、ネ・ウィン大統領軍政下のビルマへ下見調査に出かけたのである。外交官だった友人の父親に書いていただいた紹介状を手に、当時の首都ラングーン（現ヤンゴン）の日本大使館に鈴木孝・特命全権大使を直接訪ね、主旨をご説明したところ大使には好意的にお聞き届けいただき、ビルマ航空へ協力依頼のお願いをしていただいた。そのお蔭でビルマ航空から国内交通機関、及び旅行全般に亘って多大な協力を得られることになり、巡拝団は翌年１月成功裏に実施された。

時のビルマ政府では、前記加藤隼戦闘隊出身で隻脚のパイロットとして名を馳せた檜与平大尉が、所沢の陸軍航空士官学校隷下の明野教導飛行師団（三重県）で、教官を務めていた当時の教え子のひとりが閣僚を務めていた。そのことから巡拝団参加者全員が、思いも寄らず政府迎賓館で開かれた歓迎レセプションに招待され、温かくもてなされる嬉しいハプニングとなった。それが翌日全ビルマ国内の新聞、ラジオで大々的に報道される大歓迎ぶりとなった。その一事が他の旧陸軍航空隊戦友会に好意的に伝播され、翌年以降各航空隊戦友会戦跡巡拝団を数多く企画実施するきっかけになった。その巡拝団実施の実績により75年以降毎年旧厚生省援護局から太平洋戦争戦没者遺骨収集事業のうち、中部太平洋方面遺骨収集団に関する一切の手配業務を請け負い実施することになった。私は毎年のように１カ月間に亘りサイパン島に常駐することになり、同時に新たに多方面の巡拝団の企画準備、遺骨収集資料入手、調査のために、個人的に、或いは旧厚生省の要請により、太平洋戦争に関係する地域や島々をしばしば訪れた。

最初のうちは遺族や戦友の方々とともに慰霊祭の場で、頭を垂れ慰霊の気持ちを捧げていただけに過ぎなかった。しかし、同じような機会を度重ねるうちに、次第に戦場で友を喪った戦友や戦争の犠牲者とも言える遺族らの悲しい胸の内が少しずつ心の中で理解できるようになって行った。遺族や戦友の方々と少しずつ気持ちが繋がり、交誼を深めて彼らの戦没者慰霊に真心を込めてお手伝いするようになった。

こうして旧日本軍兵士が戦没された国々や、国際的な戦争、紛争、内戦などの地域を訪れる機会は年々増えて行った。戦争

について耳学問だけでなく、実際に戦地へ出かけてそこに漂う空気に触れ現地の人々から話を聞いてみることが、戦争を真に理解し、反対する大きな力になると実感できるようになった。

過去半世紀の間に実際に訪れた国と島々は、戦没者遺骨収集のため度々出かけたサイパン、テニアン、ロタ、グアム、トラック、ヤップ、パラオのペリリュー、アンガウル島などの中部太平洋諸島を始めとして、ガダルカナル、ブーゲンビル、ニューブリテン（ラバウル）島など南太平洋のパプア・ニューギニア、ニュージーランド、オーストラリア、そしてインパール近くの山野まで30回近くも訪れたビルマの他に、マレーシアのコタバル、ボルネオ島のサンダカン、タイのシンゴラ、ベトナム、カンボジア、インドネシアのスマトラ、ジャワ島、フィリピンのルソン、ミンダナオ、セブ、コレヒドール島、サハリン（旧樺太）の北緯50度線の旧国境周辺や旧豊原、シベリアのチタ、イルクーツク、ハバロフスク、南京、哈爾浜（ハルビン）、盧溝橋、奉天などの旧満州、チベット、旧日本軍が進駐した国々や日本と所縁のある島々などである。更に「キューバ革命」の地キューバや、アラブ・アフリカではエジプトのスエズ運河、部族闘争の絶えないスーダンやエチオピア、ジブチ、アパルトヘイトの南アフリカ、第３次中東戦争の当事国ヨルダン、内戦の末独立したアデン（現イエメン）、レバノン、イラン、トルコ、旧ユーゴスラヴィア、ユダヤ人の母国イスラエルのエルサレム、パレスチナ自治区ベツレヘムなども訪れた。その他に、真珠湾や、古代トロイ戦争の聖地トロイ、東西冷戦下の東西ベルリン、アフガニスタン・パキスタン国境のカイバル峠、連合軍が上陸作戦を敢行したノルマンジー海岸などへも足を運んだ。

このように戦争と所縁のある土地を幾度となく訪れ戦没者を慰霊している間に、気がつくといつの間にか半世紀が過ぎていた。この間いつも思っていたのは、戦争の虚しさとばかばかしさだった。太平洋戦争における日本人の戦没者は実に３１０万人に上る。内外の慰霊祭に出席する都度、遺族の方々の憔悴した悲しみの姿と痛恨の涙を見て、遺族の気持ちに沿った新たな悲しみと憤りが募ってくる。その気持ちを今もなおどこかでそのまま心の中に引きずっているような気がしている。

こうして自分の中の戦争観を改めて整理し、戦争に反対する気持ちを固めるためには、アウシュヴィッツを見学することは避けて通れないと考えるに至った。

4．「涙を流すより考えてほしい」

アウシュヴィッツへの旅は、計画段階で収容所見学の予約手配に面倒な手間が予想されたため、手慣れた気楽なひとり旅より、やや窮屈だが、希望通りのコースが組み込まれたツアーに便乗した方が効率的、かつ経済的だと考え、ツアーに参加することに決めた。幸いヘルシンキからバルト海をフェリーで横切り、エストニアの首都タリンからバルト３国を南下し、バスと列車で一気にポーランドのクラクフまで下り、アウシュヴィッツを訪れる格好のツアーを見つけることができた。

バルト海に面したエストニア、ラトヴィア、リトアニアの３つの国は、それぞれ日本とは歴史的にも、文化的、地勢的にもまったく別世界である。いずれも小さな国でありながら、立地的にバルト海に面して交易上、商業発展上独自の重要な位置を

占めている。かつてエストニアのタリンとラトヴィアのリーガは、ハンザ同盟都市として繁栄を競った。だが、その地の利の故に中世以前から周辺国のデンマークやスウェーデンに肥沃な国土を狙われて侵略され、近代に入ってからは周辺の強国ソヴィエト・ロシア、ドイツ、ポーランドなどに侵犯、支配され、国土は強大国の力関係によって恣に蹂躙された。第２次世界大戦が勃発すると、ソ連はそれぞれ独立国だったバルト３国に侵攻し、強制的にバルト３国をソ連邦に編入させた。戦後はバルト３国それぞれがソ連邦のひとつに組み込まれていたが、91年12月社会主義国家の牙城だったソヴィエト連邦の崩壊によりバルト３国は漸く独立国となり、今日ＥＵ加盟国の中でも小国ながらも歴史的遺産と伝統により特異な存在感を示している。

バルト３国からショパンの国ポーランドに入り、首都ワルシャワから第２の都市クラクフへ特急列車で向かった。途中停車駅のホームから流れてくるショパンの名曲♪**ノクターン**♪が耳に心地よい。エストニアのタリンからポーランドのクラクフ、そしてアウシュヴィッツまで中欧を縦断する１５００㎞を走破する長いセンチメンタル・ジャーニーとなった。

アウシュヴィッツ収容所の名が、世界的に知られるようになったのは、戦後大分時が経ってからのことである。そこには東西対立の中で米ソ両大国の政治的駆け引きがあったことが大きく影響している。糾弾されるべき当事国のドイツは戦後東西２つのドイツに分断され、東西ドイツともにそれぞれ背後に構える戦勝国米ソ両大国の戦略と駆け引きに左右される微妙なシチュエーションにあった。そのため東西両陣営ともに人権や、民族問題が絡む複雑な問題を積極的に解決しようという空気は極めて希薄だった。更に戦時中国土を複雑に分割占領支配され甚大な被害を負わされたうえに、戦後ソ連の影響下にあった東欧圏内のポーランドも、かつての占領国ソ連と東ドイツに対するこだわりや複雑な国内事情も絡んで、積極的にホロコーストとアウシュヴィッツ収容所の残虐さをアピールする姿勢を示すことができなかった。

ホロコースト、及びアウシュヴィッツ収容所が世界的に知られるようになり、海外の人々がここを訪れるようになったのは、78年アメリカのテレビ局ＮＢＣで関連のテレビドラマが放映されて大きな話題となってからのことである。翌79年にはドイツでも同ドラマが放映され大きな反響を呼んだ。

２０１１年の博物館見学者数はまだ１４０万人だった。しかし、その後見学者の数は年々増え続け、16年にはその数は２００万人を超えた。現在最も見学者が多いのは地元のポーランドで、全体の44％に当たる。多くのポーランド国民が見学に訪れるのは、悲惨なホロコーストを決して忘れてはならないというポーランド国民としての責務、矜持、使命感と屈辱感、更に戦争に対する強い憤り、歴史継承への強い決意と反省であろう。

同じように、犠牲となったユダヤ人の国イスラエルからの見学者は、ポーランド、イギリス、イタリアに次いで多い。実は、イスラエルからの見学者は当初それほど多くはなかった。しかし、ポーランド側からこの残虐行為をともに世界に訴えようとの呼びかけもあり、80年代後半になってから急激に増え始めた。その数は加害者であるドイツ人よりも多い。

アウシュヴィッツ訪問者は概して若い人たちに多い。26歳より年長の見学者は全体の26％、即ちほんの４人に１人しかおら

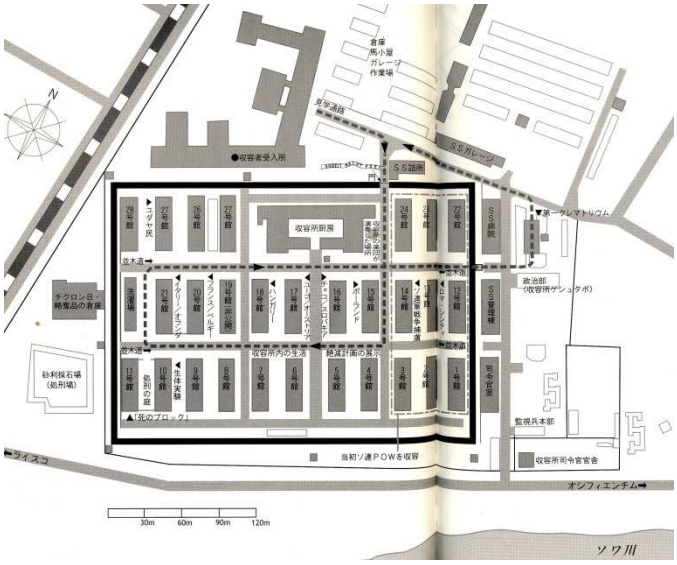
ず、25歳以下の若者(成人の付き添いなしに、14歳未満の子どもの入場は認められていない)が圧倒的に多い。とりわけイスラエルからやって来る見学者の中には子供たちの姿が多いのが目につく。彼らは教師に引率され社会見学授業の一環として、戦争の歴史を赤裸々な資料を目の当たりにして学ぶ。それに引き替え日本からの見学者は比較的年配者が多い。

アウシュヴィッツ収容所見学は、国家指定の公認ガイドによって案内される。その中に唯ひとりの日本人公認ガイドである中谷剛氏がおられ、20年間に亘って公認ガイドを務めている。中谷氏は都合のつく限り日本人見学者の案内役を務め、アウシュヴィッツの悲劇を解説して、この悲劇を再び繰り返さないよう訴えている。昨年ＮＨＫ・ＢＳ放送により「ただ涙を流すのではなく～〈分断する世界〉とアウシュヴィッツ」と題する特集番組が放映された。その中で中谷氏はアウシュヴィッツ・ビルケナウ国立博物館のカジミェシュ・スモーレン元館長が口癖のように話していた「涙を流すより考えてほしい」という言葉を繰り返し述べて、見学者にこの収容所の問題を自分自身の問題として捉え、じっくり考えてほしいとしきりに訴えていた。

5．「アウシュヴィッツ絶滅収容所」見学

２０１７年９月下旬、アウシュヴィッツの空はどこまでも青く晴れわたっていた。この日宿願だったアウシュヴィッツ収容所を訪れることになった。宿泊していた世界遺産都市・クラクフから車で２時間弱の距離にある。

通常ここは一口にアウシュヴィッツ収容所と括られがちだが、このオシフィエンチム地域には、いくつかの収容所と施設が散在している。最も知られているのは、普通アウシュヴィッツ収容所と呼ばれているこの第１収容所で、次いで有名なのが映画「シンドラーのリスト」でも囚人が貨物車で送り込まれる場面で紹介された、第１収容所の西２㎞にあるビルケナウ第２収容所である。その他にモノヴィッツと呼ばれる第３収容所がある。われわれが訪れたアウシュヴィッツ第１収容所とビルケナウ第２収容所の間は、車で10分ほどの比較的近い距離にある。



アウシュヴィッツ第１収容所平面図（「アウシュヴィッツ博物館案内」2012年版）より転写）

２つの収容所は単なる収容所ではなく、「名は実を表す」ように厳しい生活を強いる「強制収容所」と呼ばれ、辿り着いた果てには「絶滅収容所」と絶望的な名を付けられた。

ここは、個人的に見学することは認められていない。事前にグルー

プで申し込み、公認ガイドが予約されて初めて訪問、見学が可能になる。

知人の田中寛（「核」「生物」「兵器」に反対する）ＡＢＣ企画委員会代表は、昨年ロンドン大学客員研究員としてロンドン滞在中，個人的にこのアウシュヴィッツ収容所を見学しようと訪れた。だが、個人で見学することはできず、ホテルで不安を抱えたまま見学ツアーを申し込んだところ、幸運にもツアーの予約が取れて夫人ともども参加することができ、各国さまざまな旅行客に交じって見学することができたという。

私たちのグループは、午後2時30分入館の約束だった。やや早めに着いてみるとすでに建物前の駐車場には10台以上の観光バスが停まっていた。自家用車も多い。入口周辺には多くの見学者が取り巻いていた。約束の時間になってやって来たポーランド人公認ガイドの案内で博物館と称せられている収容所内へ入った。ここではA4サイズ大以上の手回り品は中へ持ち込めず、カメラは撮影料を支払うなどいくつかの条件を課せられる。入口の鴨居にポーランド語、英仏語で「入口」と表示されたレンガの建物内に入る。「やって来たぞ！」と心の中で自らに言い聞かせ、大きく深呼吸をして静かに建物内へ入って行った。これから約3時間に亘って収容所を見学することになる。

収容所専用のガイディング・レシーバーを両耳につけ、ガイドの指示と案内に従って収容所敷地内を歩いて回る。赤レンガの収容棟群とポプラの並木の内部に入るゲートの上にはやや見にくいが、大きな文字で《ALBEIT MACNT FREI》（働けば自由になる）とポーランド語で書かれている。そう、ここに収容された人々は、最初は労働者として自らの運命を知らされることなく、この有刺鉄線に囲まれた収容施設へ送り込まれたのである。そのゲートを潜り抜け古いレンガの建物を案内に従って見学する。グループとして行動することになるが、あまり1カ所に留まり時間を費やすと次のグループがやってくるので、要領良く見学しスムーズに移動しなければならない。われわれの前にも、後ろにも外国人のグループが一団となって歩んでいた。

ここには約30カ所の施設があるが、すべての収容所建物が公開されているわけではない。公開され見学が許されている建物のうち、訪れた施設をざっと紹介したい。

最初に鉄条網で囲まれた収容区域に入り4号館に入館する。ここは1階と2階のフロアに第1展示室から第6展示室まで分かれていて、それぞれ特徴ある写真などの展示品が飾られてい

アウシュヴィッツ収容所入口周辺

いよいよ敷地内へ「働けば自由になる」

る。ガイドから最初にここで大きなヨーロッパの地図について説明を受ける。地図は42年から44年までの間に連れて来られたユダヤ人が住んでいた故郷とゲットーを表している。地域別に一番多く連行されたのは、ハンガリーからの移送者で43万人もいた。次いで、ポーランド国内から30万人、以下フランス６万９千人、オランダ６万人、ギリシャ５万５千人だった。アウシュヴィッツへ連行された収容者は、１３０万人もいたが、その内１１０万人がユダヤ人、ポーランド人14～15万人で、その他に民族浄化の対象とされたジプシー（ロマ人）２万３千人、独ソ戦で捕虜となったソ連軍兵士１万５千人も含まれていた。地図の前には、とても見ていられないような衝撃的な女性や子どもたちの写真が貼付されている。２階の第４展示室には、ガス室と焼却炉の模型が展示されている。隣の第５展示室には、焼却炉で焼かれる前に刈られた毛髪が展示されている。第６展示室には、衝撃的な２枚の写真もある。収容所解放間近の45年１月に大量殺人の証拠隠滅のため倉庫に放火した時のものである。これは時間的に証拠隠滅にはほとんど間に合わず、多くの没収私物が残された。それらは男性用衣服25万着、女性用衣服84万着、子ども用衣服12万着の他に、靴や、メガネ、歯ブラシ等々の没収品の一部だった。

グループで行動（上）・監視塔をバックに

収容所４号館内の展示品と展示写真

６号館には、戦後生還した画家が描いた絵や写真が展示されている。これによってユダヤ人らの収容所内の様子が分かる。収容者は、アルファベット順に整列させられ、囚人番号を受け取り、裸にさせられて体毛をすべて刈り取られ消毒液で身体を拭かれた後、シャワーを浴び、隣の部屋で縞模様の「囚人服」と木靴を配布された。女性に

とって屈辱的だったのは、憲兵隊の前で全身裸にされ、体毛をすべて刈り取られる行為をなすがままにさせられたことだろう。建物内の通路には、両側に収容者の写真がずらっと掲示されている。写真には、囚人番号、名前、生年月日、職業などが記されている。ここの第４展示室には、子どもたちの写真も展示されている。アウシュヴィッツへ連行された収容者のうち、実に18％に当たる23万人が18歳以下の子どもだった。ユダヤ人の子どもたちは働く能力がないとみなされ、ほとんどそのままガス室に連行され時を置かずに殺害された。この他にも人体実験の研究材料に利用された子どもも多かった。あどけない子どもたちが虐殺されたり、弄ばされる写真の様子から事実を想像するのはとても堪えられない。

６号館を出て並木道を西へ進み、10号館と11号館の間の左手に「処刑の庭」があり、その背後に「死のブロック」がある。前者は、脱走を試みた収容者が射殺されたところで、後者は収容所内の刑務所であり、処刑所とも言える場所で、有罪とされた収容者はここで処刑された。いずれも遠目に見るのも堪え難い場所である。

焼却場内の死体焼却炉

11号館は、ナチスの国家秘密警察「ゲシュタポ」による即決裁判所だった。ここの裁判は死刑の判決を下すためだけの場所だった。１人の審理に僅か１分しか時間をかけなかったと言われる。ある証言によれば、２１０人の内、２０６名に死刑を言い渡し、４名にそのままアウシュヴィッツ収容を決めた裁判は、たったの２時間で終わったという。

「死のブロック」から右へ曲がり１本北側の並木道を入口方面へ戻り、鉄条網に囲まれた収容所区域から出て第１クレマトリウムへやって来る。ここは死体処理場で内部は焼却場と竈である。これこそが、映画や写真で何度となく見てきた残酷な人生の終着駅だ。そこから外へ出ると背後に社宅風の大きな２階建ての建物が目に入る。アウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所長だったナチス親衛隊中佐ルドルフ・ヘスのかつての仕事場兼自宅である。その仕事場からすぐ近くに見下ろすことができる

収容所長ルドルフ・ヘスの事務所兼自宅

ヘスが処刑された処刑台

収容所周辺は有刺鉄線で囲まれている。

クレマトリウム脇の盛り上がった小さな台地には、47年4月ヘス収容所長が処刑された絞首台がある。

ルドルフ・ヘスは死の直前になっても自らの行為を反省することはなく、「再びやり直せるとしても同じ行動をとるだろう。後悔はしていない」と殺人鬼らしく強気に辞世の言葉をつぶやいたという。

生々しく重苦しい空気に触れたアウシュヴィッツ第1収容所を見学し終えて、ビルケナウ第2収容所へ向かった。ここは第1収容所に比べ、敷地面積は遥かに広い。面積1・75㎢、東京ドーム約37個分の敷地内に300以上の施設がある。横に長く広がったレンガの建物の中央部から収容所敷地内へ入る。ここには列車の引き込み線が敷設され、遠路を貨物列車で運ばれてきた収容者はここで降ろされた。彼らの運命はここで生死の分岐点を迎え、第1回目の地獄の判定を下されたのである。

広い敷地の中の兵舎のような木造の建物が見渡す限り建ち並んでいる。その建物に沿って歩いて2棟ばかり内部を見学する。ひとつは寝室棟で、光も射し込まない薄暗い体育館のような建物内に木製の3段式ベッドがびっしり組まれている。まるで家畜小屋と変わらない。もうひとつは、大きな共同便所だった。便器の周囲には、何の囲いもなく石に穴が掘ってあるだけの便器が横一列に並び、前にも同じように便器が並んでいる。対面する収容者仲間とお互いに顔を合せながら用を済ますようにさせられたのだ。

このトイレットを見納めにビルケナウ第2収容所を離れることになった。大量虐殺の現場である「非現実的な舞台」にサヨナラを告げるには、共同便所とはあまりにも象徴的で皮肉に思えた。

ビルケナウ第2収容所中央入口施設内

ビルケナウ敷地内の収容棟群

ビルケナウの寝室内ベッド（上）と共同便所

6．なぜユダヤ人は虐殺されねばならなかったのか？

４千年の長い歴史を誇るユダヤ民族が、どうして過去においてこれほど厳しい仕打ちを受けなければならなかったのだろうか。同じ人間として生まれながら、ユダヤ人はなぜこれほど嫌われ、恨みを買わなければならなかったのだろうか。そこには、ユダヤ人の容貌や日ごろの行動など表面だけではとても分からない民族的、宗教的、歴史的、精神的など数々の要因が隠されている。

ユダヤ人に対する迫害は、パレスチナの地エルサレムに定住していたユダヤ民族をキリスト教徒が追放したことに始まると言われている。エルサレムにカトリック・キリスト教が生まれ、それまでユダヤ教を信仰しエルサレムに定住していたユダヤ民族が、イエス・キリストを救世主として認めなかったことがそもそもの理由とされている。その理由もキリスト教がユダヤ教の一分派として出発し、カトリックのバイブル・旧約聖書が元々ユダヤ教の聖典であったことが、キリスト教徒にとっては耐え難かったからだと穿った見方をされている。

近代に入ってから第２次世界大戦終結に至るまでの間も、ユダヤ教徒がなぜヨーロッパ中、否世界中の人々から疎まれ、蔑まれ除け者にされてきたのか。ユダヤ教徒でもなく、クリスチャンでもない日本人が簡単に理解することは難しい。

「新約聖書」マタイによる福音書第５章・ルカによる福音書第６章には、「汝の敵を愛せよ」とのイエス・キリストの言葉が見られる。自分の敵は憎むものとの世間の理解に対して、イエス・キリストは「自分を愛してくれる人を愛することは、誰にでもできる。悪意をもって自分を迫害する者にこそ、慈愛をもって接しなければならない」と戒めた。しかし、キリスト教徒による反ユダヤ民族思想は、このイエス・キリストの慈愛溢れる言葉と矛盾することになるのではないかとの疑問は残る。

定住の地を失ったユダヤ民族は、流浪の民となって地球上を彷徨い歩く運命を抱えることになった。祖国を持たず、転々と定住地を求めながらも異国の都市から、またあらゆる公職からも追いやられ、ひたすら砂漠の地を移し代えて生き延びて行った。中世ヨーロッパのユダヤ人は農業に従事できず、手工業のギルドにも参加できなかったため、必然的に自らの才覚を活かして税金の取り立てや金融業、商業取引などに従事する者が多くなっていった。狡猾と考えられがちのユダヤ人は、賢く勤勉で瞬時に生き抜くための知恵を身に着け、資産を築いて行った。

そのしたたかな生き方が反って一層他民族から羨望と僻み、妬みを買い、一層敬遠され排除されるようになった。彼らユダヤ人にとっては物質的な資産はそれほど必要とせず、換金して現金を手に持つことが一層重要になった。これが「ベニスの商人」でも揶揄され、ユダヤ人をしてガメツイとか成金、或いは金の亡者と呼ばせるきっかけとなった。それでも苦難に遭遇しても生命力の逞しいユダヤ民族の高い知的能力はずば抜けていた。

実際ユダヤ人は幅広い分野で活躍し、古今東西その名を知られた政治家の他にも、学者、音楽家、作家、画家ら数多くの文化人たちを世界中に輩出している。

マルクス、トロッキー、アインシュタイン、オッペンハイマー、フロイド、スピノザ、メンデルスゾーン、クライスラー、メニューヒン、ガーシュウィン、ブルーノ・ワルター、カフカ、ハイネ、トーマス・マン、シャガールら実に多士済々である。アメリカ人大実業家の半数はユダヤ人によって占められているとも言われ、アメリカはユダヤ人がいなかったら、今日の経済的な繁栄を謳歌することはできなかっただろうと囁かれている。苦難に遭遇しても生命力の逞しいユダヤ民族は、結束して世界の各地へ流れて行った。人口の割合から考えてユダヤ人の世界文化への貢献度は並外れている。ユダヤ人なくして現代の高度文明はあり得なかったとさえ言われている。

中世に入るとともに大航海時代に入ったキリスト教ヨーロッパで最もエポック・メーキングな出来事は、コロンブスがアメリカ新大陸を発見した１４９２年、スペインでキリスト教徒によるイスラム教徒駆逐運動（レコンキスタ）が行われたことである。この時イスラム教徒と同時に、ユダヤ教徒もスペインから放逐したことを見逃してはならない。カトリック王と言われたフェルナンド王とイサベル女王の２人の国王によって、全ユダヤ人に対して４カ月以内にスペイン領から出て戻ってはならないと厳しいユダヤ人追放令が発せられたのである。これによりスペイン在住の15万人のユダヤ人が国外へ追放された。

ユダヤ人排斥の動きは、全ヨーロッパ中に浸透し、近代20世紀以降もゲルマン民族優生学的な考えのうえに、軍国主義を推し進めたドイツでは、その空気がとりわけ強かった。ドイツでは、19世紀前半にすでにナチズムに直結する反ユダヤ主義的な運動が始まっていた。１８７１年成立したドイツ第２帝政により一度はユダヤ人解放が進み、第１次世界大戦開戦時にはドイツ国内の政党政治は、挙国一致の旗の下に反ユダヤ的な動きを一時的に低下させた。ところが、戦局が悪化するにつれ、食料不足、耐乏生活の状況にドイツ国民の不満が嵩じ、それがドイツ人のドイツ系ユダヤ人への不満に向かわせ、ユダヤ人は祖国ドイツのために闘っていないと一方的にユダヤ人への非難が高まった。だが、この頃敗勢に追い込まれていたドイツは、１９１８年11月ついに降伏することになった。このドイツの敗戦によって反ユダヤ主義は一時後退を余儀なくさせられた。

しかし、戦後まもなく設立された「ドイツ瓦解に対するユダヤ人の責任」を追及する「ドイツ民族至上主義攻守同盟」を名乗る団体によって、性懲りもなくまたもや反ユダヤ主義は力を取り戻していくのである。ドイツの反ユダヤ主義は、体質的に身体の中に刻み込まれていたと言える。それが露骨になったのは、ヨーロッパ社会の伝統的な反ユダヤ主義を背景にヒトラーが率いるナチスが反ユダヤ主義を巧みに政治に取り込んで政権

を獲得した時である。

１９３３年政権を握ったアドルフ・ヒトラーは「わが闘争」の中で、頑なに歴史は文化創造人種アーリア人と文化破壊人種ユダヤ人との闘争であると激しく規定している。ヒトラーは、不遜にもアーリア民族共同体であるドイツ国民こそ生き残ることが許され、ユダヤ人は殲滅されるべき絶対的な敵として、生きるに値しないとまで断末魔的に断じたのである。ユダヤ人との婚姻を禁止し、悪名高い「ニュルンベルク人種法」のひとつ、「ドイツ国公民法」では純粋なアーリア人、つまりドイツ人、またはこれに類縁の血を引く者をドイツ公民として認め、その一方で単にドイツ国籍を有するユダヤ人を２級市民と見做したのである。ユダヤ人を判定するために、２世代まで遡ってユダヤ民族の血統を判定する執拗さだった。これほどの民族虐待思想があるだろうか。それでもヒトラーのユダヤ人排除の考えは些かも揺るがず徹底していた。ドイツは国内でユダヤ人を囲い込み、自由を許さない地区を「ゲットー」と指定して彼らを監視し始めた。

ユダヤ人に対するのと同時に、ナチス・ドイツはロシア革命後生まれたボルシェビキ（ロシア社会民主労働党内の革命派グループ）をも目の敵にした。41年６月ソ連に侵攻したナチス・ドイツ軍は、ソ連国内の多くのユダヤ人を手当たり次第に殺戮した。その当時ソ連領内にはおよそ３００万人近いユダヤ人がいたが、その内50万人ものユダヤ人を大量虐殺したのである。そして次のターゲットになったのが、ポーランド領内のユダヤ人だった。ドイツ国内にユダヤ人が約56万人いた当時、ドイツのポーランド支配地域内には遥かに多い３００万人のユダヤ人が居住していた。ヒトラーが政権を掌握した時、ヨーロッパ中のユダヤ人は、ほぼ1千万人に達していたと推測されている。ヨーロッパ中にこれほど多く存在するユダヤ人を、ドイツの傲慢で一方的な反ユダヤ主義思想により、優性民族であるゲルマン国家に災難や国難をもたらす「厄介者」民族として容赦なく殺戮、排除したのは、あまりにも傲慢で人道に反し、倫理的にも許し難い暴挙だった。

それでも勢いづいた極右ナチス・ドイツは、38年オーストリアを併合し、新たにオーストリアの18万４千人のユダヤ人を抱えることになった。翌39年３月にはチェコスロヴァキアを併合し、更に35万７千人のユダヤ人を抑留した。

独ソ戦でドイツ側に立ったハンガリーは、それ以前からルーマニア、チェコスロヴァキア、ユーゴスラヴィアの一部地域を占領し、多くのユダヤ人をハンガリー国内に存在させ、東ヨーロッパ圏内でその力を強大化しつつあった。その数は一時期82万人にまで増大したが、その対応と処置に苦悩し、独ソ戦でドイツの意を斟酌したハンガリーは、５万人のユダヤ人兵士を東部戦線に送った。アウシュヴィッツ収容所内では１１０万人近いユダヤ人が犠牲となったが、その最大のグループはハンガリー系ユダヤ人だった。全体のハンガリーのユダヤ人犠牲者の数は実に56万４千人に達した。

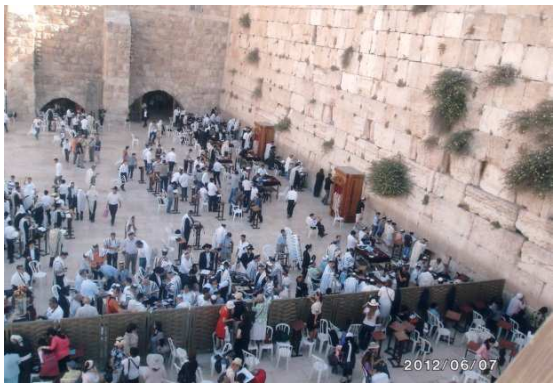
そして、ドイツは39年10月最もユダヤ人の多いポーランドに侵攻し、西部ポーランドを占領支配し、結果的に全ポーランドに在住のユダヤ人３００万人のうち２００万人を支配下に置くことになった。

ポーランドに侵攻して多くのユダヤ人を抱えたドイツは、ポ

ーランド国内に多くのゲットーと強制収容所を設け、彼らをここに押し込め日常生活から抑圧して行った。ゲットーから徐々に収容所に移送させられたユダヤ人は、その後アウシュヴィッツからビルケナウへ移された。そして運命はビルケナウで死へのゴールを選別された人たちに犠牲を強いることになった。

第２次世界大戦は、ユダヤ民族にとって死ぬか生きるかの瀬戸際に追い込まれた厳しい試練だった。ユダヤ人は壊滅的な迫害を受けながらも逞しい生存能力によってヨーロッパ各地にユダヤ人社会を創建し、地域社会で経済的な力を発揮し、今日まで荒れ狂う嵐の中を潜り抜けて生きながらえてきた。

今日２千年に亘る放浪の歳月を経て、ユダヤ民族が自らの父祖の故郷であるパレスチナに、漸くユダヤ独立国家として国連の議決によって先祖返りしたのは、第２次世界大戦が終わった２年後の１９４７年11月のことであった。



エルサレムの嘆きの壁

神殿の丘に建つ岩（黄金）のドーム

しかし、それより遡ること１００年前の１９１７年11月２日ロシア10月革命の５日前に、イギリスはバルフォア外相がパレスチナの地にユダヤ人の民族的郷土の建設を約束した「バルフォア宣言」を表明した。だが、それはイギリスの二枚舌外交とも言える裏切りによるもので、ユダヤ国家とアラブ国家の共存という形で提案されたものだった。それでもこの宣言により曲がりなりにもイスラエルの建国が世に知らされた。

イスラエルは48年独自に独立及び建国を宣言した。しかし、それは今以てイギリスの亡霊により翻弄され続けている。現在イスラエルの首都はテルアビブとされているが、イスラエル自身はエルサレムを首都として認めるよう国際社会に強く求めている。それでもその希望が思い通り叶わない複雑な現実がある。

現実はアラブ諸国との複雑な独立抗争や、複雑な領土問題が絡んで、国土は当初の思惑とは大きく異なり、イスラエルにとってかなり不満の残るものとなった。その鬱憤のはけ口が67年６月電撃的な対アラブ作戦による「６日間戦争」と呼ばれる第３次中東戦争へ発展させた。この戦いでイスラエルは圧倒的な勝利を収め、バルフォア宣言で約束された領土の一部・ヨルダン川西岸は、取り敢えず自国領土として奪還、支配している。

今ではイスラエルは、アメリカを主に、多くの西ヨーロッパ諸国と友好的な外交関係を築いている。現在イスラエルが対立関係を強いられているのは、パレスチナをユダヤ民族の地として認めず、エルサレムはイスラム教国の発生の地として一歩も譲らないパレスチナ自治国を始めとするイスラム系アラブ諸国

である。ヨーロッパの反ユダヤ主義は戦後表面上鳴りを潜めたが、ユダヤ人の聖地と言われるパレスチナ地域における対立と抗争は、２千年の時を経ながら今も解決されていない。

7．ユダヤ人に対する日本人の接し方

わが国には戦前からユダヤ人とユダヤ教信者はそれほど多くは住んでいない。また、地形的にもパレスチナから１万㎞も離れてどうしても遠い国との印象は否めず、それほど親近感が感じられないのもある面で当然であるかもしれない。戦前は横浜、神戸、長崎など港町を中心にユダヤ人コミュニティーが存在し、１万人を超えるユダヤ系の人々が日本国内に居住していた。

日露戦争に日本が勝利を収めたのも、実はユダヤ系アメリカ人の銀行家が投資した巨額の資産によるものだったと言われている。しかし、戦時中にこれらの人々は日本を離れアメリカなどへ去って行った。現在日本に在住するユダヤ人は１千人にも満たないと見られている。

それでも明治維新後スコットランド人の著書「日猶同祖論」により、日本人とユダヤ人の近い関係が紹介され話題になったことがあった。同書によると、日本人とユダヤ人は共通の先祖ヤコブを持つ兄弟民族であると考えられた。しかし、このユニークな説はその後ＤＮＡ血液鑑定により否定されてしまった。

日本とユダヤの間には、信仰、主に神道と双方のしきたり面において次のように類似点も多い。

① 水や塩で身を清める禊の習慣がある。

② エルサレム神殿の門には、天皇家の十六菊花紋と共通の紋章が刻まれている（イスラム国ではあるが、メソポタミアのバビロン・イシュタル門にも十六菊花紋に似た紋章が刻まれている）。

③ 古代ヘブライ神殿と神社の構造が似ている。

④ 伊勢神宮暦は日本の他の神社暦とは異なるが、ヘブライ暦とは似ている。

⑤ 古代ユダヤの聖櫃は、日本の御神輿と似ている。

⑥ カタカナとヘブライ文字に類似点が多い。

⑦ 生後30日目に赤ちゃんを神社(神殿)に初詣でさせる習慣は、日本人とユダヤ人の間にしか見られない。

⑧ ユダヤのメズサ（護符）は日本のお守りに似ている。

イシュタル門の十六菊花紋（「十六菊花紋の謎」より転写）

他にもいくつか相似点が見られる。日本人とユダヤ人との交流はさほど深くないと思われがちであるが、案外知らないところで、特に日本古来の神道において相互に意外な共通点があることに驚かされる。

現実的な相互交流の面では、戦前満州で「河豚（フグ）計画」と呼ばれた日本人とユダヤ人の交流プログラムが企画されたことがあった。31年満州事変を経て満州国を建設した日本は、迫害を逃れ哈爾浜（ハルビン）に居住していたユダヤ人を満州国民族協和の精神から、関東軍がユダヤ人への差別行為を徹底的に取り締まった。37年から40年にかけて「河豚計画」と呼ばれたユダヤ人と日本人との融和計画が推進され、毎年交流のための「極東ユダヤ人大会」まで開催されたほどである。しかし、40年に日独伊3国同盟が締結されたのを機会に、この大会は同盟国ドイツに敵対的な行事と受け取られることを憂慮して中止されることになり、ユダヤ人とのパイプであった友好的な「河豚計画」は幕を閉じることになった。

このように日本とユダヤ社会との繋がりは、さほど強くないように思われがちであるが、ある面では逆に強いパイプで繋がっていた時期もあったことを忘れてはならない。

8．現代の差別意識と排斥問題

近年中東アラブを中心に世界各地でテロリストによる危険なテロ行為が頻発している。そこには諸事情により同じ民族、部族同士による内戦もあり、イスラム国（IS）のような外部の過激派集団による無差別テロもある。国外からテロ組織の侵入により、国の存立基盤が破壊されつつある国もあって、武器もなく身を守る手段を持たない人々は止むを得ず母国を捨て、他国へ逃れて行く。こうして治安悪化と貧困から住み慣れた土地を離れて国外へ逃げ出し、難民となる人々がこの数年急増している。

今国際的にこのような人々が難民となって溢れ出て、彼ら難民が短期間の間に押し寄せてくる国々にとっては、国家の厳しい死活問題ともなっている。ある程度彼らを受け入れることは可能であるにせよ、その数は先行きが見えないまま益々増加する傾向には限界があるというのも事実である。人道的な見地から移民、難民を受け入れようとする国々にとっても、これ以上彼らを受け入れ切れない事態がやって来つつあるのだ。それを見越して最初から門戸を閉じてしまう国もある。

確かに異民族を受け入れることは、それまで同じ民族として相互理解と協力の下に共存してきた国民にとっては、有史以来の驚天動地の出来事であるには違いない。

多くの難民の発生と受け入れは、今や国際社会にとって解決を迫られている喫緊の課題となっている。受け入れる国が想定外の彼らの入国に悲鳴を上げ、次第に難民受け入れを拒絶する傾向が生まれて来ているというのが実態なのである。人間は、見ず知らずの異国民とはそう簡単には仲良くなれないものだ。よほど気心の知れた同じ仲間ならともかく、容貌など表面上異なる民族に対しては、一見して警戒心が働き、身体的な異質な特徴などに対する偏見がどうしても異国民を差別しがちになる。

移民・難民排斥心情の奥底には、同じ人種以外の人とは生活をともにしたくないとの気持ちがある。このことが古今東西人

在日韓国人の反差別スローガン（民団編著より部分転写）

間の心情にまつわりついて抜けきれない。ユダヤ人を排斥し迫害してきた過去の歴史を振り返ると、彼らを排除することにより安寧を築けると身勝手に誤解した人々によって、残酷にも戦時中ホロコーストが実行に移されてきた戦慄的な厳しい歴史的事実がある。

戦後72年が経過して、世界は戦争に贖罪意識を感じ反省を踏まえつつも、今また異なった形で移民・難民排斥という自分たちとは相容れない文化、風俗の人たちを葬ろうとの排他意識が醸成されつつあるように思える。人間というのは、どうしてこうもわがままで反省を活かせず、懲りないのだろうか。

アメリカではアフリカから連れてこられた奴隷の解放を求めた南北戦争における北軍の勝利によって、１５０年も以前に奴隷解放が実現し、時代を経てキング牧師が暗殺された68年前後から巷の黒人差別撤廃のための公民権運動が功を奏し、有色人種に対する差別は表面上ほぼ消滅したと思われた。だが、実際には問題の根は深く膿は残されたまま現代にまで引き継がれている。昨今「白人至上主義国家」アメリカには、南北戦争の英雄リー将軍像撤去に反対する保守的グループのデモにも見られたように白人と黒人や移民とのトラブルが多発している。今日も残る有色人種・移民排斥の行動は、アメリカにとって根深い人種問題、異民族迫害の原型とも言える。「アメリカ・ファースト」のトランプ大統領は、移民によって成り立ったアメリカ合衆国の歴史を学ぶこともなく、アメリカへの入国を希望する移民に対して厳しい入国制限を行い、またアメリカとメキシコの国境地帯に敢えて高い壁を構築することまでして、露骨に移民排除を実行しようとしている。

突き詰めれば、アメリカに限らず異民族排除や蔑視の風潮は、どこの国民の間でも大なり小なり内面に抱えている問題ではある。それをそれぞれの国民が一時的に人間性や、知性、道徳倫理観、常識などによってセルフ・コントロールし、他所へ影響を及ぼさないよう努めているだけの話なのだ。

有色人種差別については、こんな思いがけない体験もあった。91年６月、南アフリカでは長年の紛争の末、漸く黒人を含む有色人種差別、いわゆる人種隔離政策（アパルトヘイト）は法律により禁止された。有色人種の国民が公に蔑視、差別される局面は、表面的には確かに少なくなった。だが、それは表面的に

見られなくなっただけで、隠れたところでは現実にあるのではないかと疑心暗鬼に陥っていた。

実際それが現実にあったのである。アパルトヘイト禁止法実施の翌92年4月、アメリカのロスアンゼルスで黒人に加えられた迫害事件が重なり、堪り溜まったストレスが暴発して、黒人による警官隊への反撃、更に警官の黒人に対する暴力の仕返しに発展し、多数の死者、負傷者を出すアメリカにとって衝撃的な事件が発生した。ニュースは、瞬く間に世界中に配信された。その時偶々アパルトヘイト発祥の地・南アフリカのヨハネスブルグに滞在していた私は、テレビを通してこの騒動を知った。その翌日南アの黒人鉱山研究員とこの件について議論したところ、その黒人男性から唐突に驚くべき本音とも受け取れる言葉を聞かされた。彼はこう言ってのけたのである。「アメリカでもアパルトヘイトを実施していれば、こんな暴動なんて起きる筈がない」。彼の言い分は、例えアパルトヘイト下で差別を受ける側にいても、安定した生活さえ保障されるなら、そのプライオリティを失いたくないと言っているようなものだ。身勝手な人間心理とはこういう理不尽で自分本位の発言をするものなのである。それが正直な人間の性なのではないか。この発言を耳にした時、アパルトヘイトも差別も、決して地球上からなくならないのではないかと暗澹たる気持ちになったことを覚えている。

翻って私たち日本人には、このような人種差別観はないと断言することができるだろうか。「おもてなし」「控え目」「おもいやり」「いたわりあい」「優美」「礼儀作法」「忖度」などの日本人の伝統的な美徳や優しさが評価される反面、「優しい」日本人の気持ちの中に、果たして忌むべき残虐性、虐待、迫害、暴力、差別などはないと言えるだろうか。

過去においてアイヌ民族、在日朝鮮人、「穢多（エタ）」のような特殊な部落民、米軍基地に囲まれて暮らす沖縄県民らに対して、突きっ放すような蔑んだ態度や言動は、残念ながら明治維新以前から多かれ少なかれ日本各地でごく普通に見られた現象であり、日本人には古来差別感はなかったと確信を持って言うことはできないと思う。

難民政策 決裂の要因に

連立交渉 独、不安定な政治不可避

ロヒンギャ難民問題 欧州、安全な帰還要求

ASEM外相会合 閉幕

ドイツの連立協議、今後どうなる？

246議席 80 67

ロヒンギャ帰還 署名 期限なお協議

ミャンマー・バングラ

「民族浄化」 米が非難声明

ロヒンギャの難民 「世界で最も深刻」

高等弁務官 日本の貢献期待

フィリッポ・グランディ氏

シリア難民と国内避難民の現状

国内避難民 難民

トルコ シリア イラク レバノン ヨルダン エジプト

シリア 約650万人

トルコ 約322万

レバノン 約100万

ヨルダン 約65万

イラク 約24万

エジプト 約12万

国連難民高等弁務官事務所の資料から

難民問題は今や世界的課題となった。

日本人の感情にも人種差別感は明らかに存在するのではないか。それならわれわれ日本人もナチスのホロコーストや、南アフリカのアパルトヘイト、在日朝鮮人に対するヘイト・スピーチなどを正面切って非難することはできないのではないだろうか。

連れて行かれるユダヤの子どもたちの虚ろで不安そうな目

アウシュヴィッツを去るに当たって、何度も立ち止まっては博物館入口方面を振り返った。この場所で残虐にも１１０万人の罪もないユダヤ人が殺戮されたのだ。そこには見学を終えた多くの人たちがまだ十重二十重に取り巻いていた。彼らの想いはどうだっただろうか。重苦しい気持ちに捉われる負の遺産である大量殺戮の現場を、今もこれだけ多くの人々が毎日世界中から見学するために訪れている。その現場を見て、再び甦ってくる根本的な疑問がある。**どうして戦争は無くならないのだろうか。どうして人は同じ人間を差別して痛みつけるのだろうか。**これは永遠に解決できない課題なのだろうか。

近年わが国では保守右極化傾向が歩一歩と着実に進んでいる。知らず知らずあの呪わしい戦争の入り口に再び近づいているように思えてならない。安保関連法、共謀罪法、憲法改正・９条自衛隊明記、北朝鮮ミサイル発射、沖縄米軍基地に発生する不祥事の対応など、国民が平和と安寧を求める気持ちとは裏腹に、それを脅かす危険なムードは益々高まるばかりで、決して座視することはできない。いかなる時代でも戦争は知らないうちにやって来るものである。

アウシュヴィッツを見学し生々しい悲惨なサンプルを目の前にして背にそぞろ寒さを感じると同時に、戦争の残虐さと非人道的な人種差別に強い嫌悪感を憶えた。改めて**絶対に戦争は起こしてはならない**と強く肝に銘じた。

成熟した結論を生み出せないまま身につまされるような重苦しい気持ちを抱きつつ、アウシュヴィッツ収容所を後にした。もう２度と訪れることはないだろうとの感慨を抱きながら、もう１度古色蒼然たる建物を振り返った。

（日本ペンクラブ理事）

【参考文献】

白石弘編「杉原千畝とその時代」（ダイアプレス）、中谷剛著「アウシュヴィッツ博物館案内」２０１２年版（凱風社）、芝健介著「ホロコースト」（中公新書）、村松剛著「ユダヤ人」（中公新書）、Ｊ・Ｐ・サルトル著「ユダヤ人」（岩波新書）、プリーモ・レーヴィ著「アウシュヴィッツは終わらない」（朝日新聞出版）、岩田明著「十六菊花紋の謎」（潮文社）、韓国民団中央本部編「ヘイト・スピーチを許してはいけない」（新幹社）、渡辺克義著「物語 ポーランドの歴史」（中公新書）他